

アフリカ的な認識論：認知と道徳の不可分離性について

河野 哲也

立教大学文学部

本発表の目的は、アフリカ、とりわけサハラ以南の思想伝統と言語に基づいた現代の思想、すなわち現代のアフリカ哲学における認識論の特徴とそのテーマについて紹介することを目的とする。

これまでの認識論が主に西洋の思想伝統と言語に基づき、かつ自然科学を対象として構築されてきたのに対して、本研究は、世界哲学の立場から、アフリカにおける認識に関わる諸概念を紹介し、そこからどのような地平が開かれるのかを検討し、これまでの認識論を相対化しようとするものである。ラトールとカロンは科学についての民族誌的記述を行うことによって科学理論が生成されてくる現場の過程を描き出した（Latour & Callon, 1991）。同様に、アフリカの伝統的思考や認識の方法についての民族誌的研究は、アフリカでの認識の営為がどのように生成されてくるかについてのネットワーク的な理解を与えてくれ、比較認識論の基礎的方法のひとつとなりうると期待できる。

アフリカの哲学は、古代ではアレキサンドリアやカルタゴは地中海文明の中心であり、ギリシャ・ローマの哲学と地続きだったと言える。またイスラム圏の哲学は、別個に専門家が論じるべきだろう。本論で取り上げたいのは、サハラ以南、とりわけ西アフリカ、アカン語やヨルバ語を用いる人々の伝統的な思想に見られる認識と真理、あるいは因果性や予言に関する

る諸概念を、分析哲学あるいは現象学の観点から論じている Barry Hallen, Olufemi Taiwo, Kwasi Wiredu, Emmanuel C. Eze たち現代の哲学者の諸理論である。彼らは認識に関わるさまざまなトピックを扱っているが、本発表で注目したいのは、西アフリカに見られる認知-規範的という一般的な認識論上の特徴と、ヨルバ語における信念と知識の区別、アカン語の真理概念である。民族誌的研究と言語分析の方法を両用しながら、これらの概念について紹介し、現代哲学にとっての含意と意義について考察する。

Hallen たち (Hallen, 2004; Hallen & Sodipo, 1986) によれば、ヨルバ人など西アフリカの人々にとって、西洋の認識概念の中でもっとも問題視されるのは、「命題知 (propositional knowledge)」と呼ばれる知である。一般的に、このタイプの情報については、これを受け取った個人はその真偽を確かめることのできない状態にあり、これを「学ぶ」とされている。西洋社会で知とされているもののほとんどは、直接的に経験・獲得された知ではなく、二次的な伝聞によって得られた命題を真として信じることから成り立っている。しかしヨルバ語では、imo (真理) と igbagbo (信念) の違いは、情報を直接に得たか、それとも二次的 (伝聞) によるかに置かれている。西洋的な知の殆どは、ヨルバ語文化では igbagbo 以上ではない。西洋語の belief と igbagbo との違いは、後者が本人による目撃によって検証されない限り imo とならないことである。したがって、ヨルバ語文化で

は、二次的な情報に付与されるのは、どこまでも、「真理」ではなく「信頼できる」ということであり、それはインフォーマントの人格的な道徳性 (iwa) に依存することになる。もちろん、ここには、伝統的なヨルバ語社会が口語による情報伝達が中心であったという事実が反映されているが、現代の通信状況においても有効性と意義をもつはずである。

ここからアフリカの認識論の根源的な道徳的特徴、あるいは知識に対する非常に批判的な態度が明らかになる (Chimakonam 2015; Kaphagawani & Malherbe, 1998)。認識は、認知的な側面から真偽のみを扱うことはできない。私たちの社会の知るものが、数少ない imo (真理) と圧倒的な量の igbagbo (信念) から成り立っているかぎり、認識とは、誠実性や信頼といった道徳的な領域の問題ですらあるのだ。Wiredu が指摘するように、アカン語における nokware という概念は、アフリカにおける認識と道徳の一体性を表現している。それは、一面において英語の truth と重複する意味を持つが、第一義的には「道徳 moral」を意味する。Nokware は、もともと「一つの koro 口 ano」という二つの語からできており、二心なきこと (truthfulness) を意味している。このように考えたときに、真理を対応に求めるにせよ無矛盾に求めるにせよ、それを道徳や美学の領域から切り離し、「純粹に」認知的な側面に閉じ込めた西洋の真理観とそれに基づいた認識論は、imo における偏った局面にのみ関心を集中させるかなり不自然な態度に基づいていると結論できるだろう。ここには、西洋社会の構造が反映されているはずである。発表では、以上のことをより詳細に論じ

る。

【参考文献】

Chimakonam, J.O. (2015). “The knowledge question in African philosophy: A case for cogno-normative (complementary) epistemology. in Chimakonam (2015): 67-81.

Evans-Pritchard, E.E. (1976). *Witchcraft, oracles, and magic among the Azande*. Clarendon: Oxford UP.

Hallen, B. (2004). “Yoruba moral epistemology” in Wiredu (2004): 296-303.

Hallen, B. & Sodipo, J.O. (1986). *Knowledge, belief, and witchcraft: Analytic experiments in African philosophy*. Stanford UP.

Kaphagawani, D.N. & Malherbe, J. (1998). “African epistemology” in Coetzee and Roux (1998): 219-229.

Latour, B. & Callon, M. (1991). *La science telle qu'elle se fait*. La Decouverte.

Wiredu, K, (1998). “The concept of truth in the Akan language” in Coetzee and Roux (1998): 239-243.